第18回総会シンポジウム記録

2002 年 6 月 15 日（土）早稲田大学

「脱国民国家」— 地域統合とグローバル化は「国民」·「国家」をどこまで変容させるか？

司会　大貫敦子（学習院大学）
平島健司（東京大学）

ドイツ人の脱ナショナル・アイデンティティ？　高橋秀寿（立命館大学）
制度としての国民国家—そのメタモルフォーゼ　広渡清吾（東京大学）
地域安全保障と国家の変容　岩間陽子（政策研究大学院大学）
対外文化政策の再ナショナル化？「ドイツらしさ」の戦略政治　川村陶子（成蹊大学）

シンポジウムのはじめに

大貫敦子

ワールド・カップのファナティックな渦のなかで、各種メディアがこぞってナショナルな感情を駆り立て、ナショナル・シンボルを自発的に顔に描き、手に持ち、体に纏い、それにアイデンティファイする人々の多さに圧倒されている今日このごろの状況のなかで、「脱・国民国家」というテーマがどこか空しく思えてくるところもある。

歴史的文脈で言えば、人権と民主主義が確立する基盤をなしてきたのは、フランス革命以降 19 世紀を通じて形成されてきた「国民国家」という制度モデルであった。しかし現在、国民国家タイプの制度は、国内的にも様々な点で疲弊現象をおこしていると同時に、グローバル化の観点からしても変容を余儀なくされている。さらには人権と民主主義に対して抑圧的に作用する側面もある。たとえばハーバーマスは、これまでの国民国家のモデルを次の 3 点に要約できる形で描いている。それは、

1．行政・税制システムとして機能し、
2．国家主権を主張する領土を有し、そこに成立する国民国家の枠内で、
3．民主的な法治国家・社会国家が発展することができた、

国民国家のモデルである。ところが、現在ではこのそれぞれの側面が、もはや自明性を持たなくなってきているといえる。

2002 年 1 月からのユーロ使用開始、そしてさらに今後進むであろう EU の政治統合は、国家主権の一部委譲を意味しているし、またグローバルな労働力の移動とその導入の必要性は、二重国籍やグリーンカード導入をめぐる議論にも見られるように、「国民」概念を変えつつあるように見える。また人権や民主主義は、国民国家の保護の下でというよりは、NGO や反グローバル化運動などに見られるように国民国家に対抗した動きの中に、国民国家型とは異なった理解を生みつつあるように思える。つまり国民主体の国家ではなく、グローバル・シヴィル・ソサエティへと向かう動きである。

しかしこれとは逆に、「国家」アイデンティティの再構築の動きが見られることも確かである。ドイツの隣国のフランス

のように、ル・ペンが大統領選の最終 2 候補に残るというような事態にまでには至ってはいないとはいえ、戦争責任をめぐる議論に基づいた戦後ドイツの自己了解 —— つまりは積極的な形でナショナル・アイデンティティを語らないこと一一に変化が生じてきていることは、ヴァルザー/ブービス論争を経て、ホロコースト記念碑を巡る議論のスタンスにもうかがえるし、またコソボ空爆への積極的参加に始まり、最近ではアフガニスタンに対するアメリカの軍事作戦への同調にいたるまでの議論に見られるように、「アウシュヴィッツを繰り返すな」という標語が 180 度方向を変えて使われていることにも見られる。

これに加えて、最近のドイツの文化政策にも、ナショナル・アイデンティティの再構築と見られる動きもある。

以上のようなドイツの状況をふまえて、「国民国家」はこうした状況のなかでどう変容するか、という問題を、日本の状況も念頭に置きつつ、4 人の発表者の方のそれぞれの観点から問題提起をしていただき、議論ができればと思う。